

プ ロ グ ラ ム ・ ノ ー ト

ロッシニは当時、「イタリアのモーツァルト」と評されていた。それもロッシニがオペラ分野でその名を知られるようになったからである。この『セヴィリアの理髪師』は、彼を作曲家として全ヨーロッパに広めた作品である。しかし、ロッシニは、全76年の生涯でオペラ作りに専念していたのは前半分であり、あの著名な『ウィリアム・テル』によって、オペラ作りにはピリオドを打っている。後に彼は大バッハに深く傾倒し、多くの宗教音楽を作曲している。また一方では、政治向きの性格も有ってか、イタリアではその活動を弾圧されたりもする。この序曲は軽妙なタッチで作られ、劇筋もあってか、起伏に富んだ、文字通り劇的な序奏をなしている。木管部の活躍が目立ち、中でもホルンには当時でも斬新なメロディーが割り当てられてオーケストレーションされている。これも幼い時、ホルン奏者であった父からホルンの手解を受けたからであろう。

『ロザムンデ』は、劇作者の依頼が切迫したものであったこともあり、シューベルトが他の為に作曲した曲を数点流用している。序曲は既に発表されていた『魔法の豎琴』序曲であった。現在は劇自体が廃れてしまった為、特にその中の4曲が選ばれて『ロザムンデ』となっている。

この曲が作られた1823年は、シューベルトにとって、どん底のときであった。母の死の衝撃と、父の意志に反したことでの父との不和―「父はもう一度僕に尋ねた。その庭が好きかと。僕は嫌いだと言った。父は僕を打ち、僕は逃げた。」(『僕の夢』より)―があった。そしてシューベルトは健康を害していた。彼は友人への手紙の中に「夜眠りに就く時、2度とまた目覚めることのない様に祈ります。」と書き送っている。死に直面したシューベルトは天の声を聞いたのであろうか。『ロザムンデ』は、ガラス細工の様な閃光を放つ逸品である。

1884年、ロンドンフィルハーモニー協会の名誉会員に選ばれたドヴォルザークは、翌年この第7シンフォニーを同協会管弦楽団の為に作曲しそこで初演した。

ドヴォルザークは40代まで不遇の作曲家であったが、1884年3月の初のロンドンへの演奏旅行で音楽家としてその名声をヨーロッパ中に知られるようになった。彼にとってロンドンは愛着の都市であったらしく生涯に9度の旅をしている。ブラームス作品の出版者として知られるジムロックは、それまで彼の小品ばかりを相手にしていたが、この第7を堺に、大曲を注文するようになった。がその後ジムロックとは不仲となり、あの『イギリス』はノヴェロ社から出版することとなった。

第7シンフォニーは、ドヴォルザークの転機のとときに作られたものである。ロンドンでの成功はしたものの、オペラ分野で今だ認められなかった彼は、友人よりスラブ的でない素材でシンフォニーを書くことをすすめられ、胸苦しい毎日を送っていた。その為か、曲全体は彼の内省的陰鬱さと、ブラームスの第3シンフォニーの影響下にあるといっている。形式的には古典派のそれを用いている。

第1楽章は、不安に満ちている。動的な和音の上に奏される主旋律とこれに続く副主題は、苦悩がありありと窺われる。第2楽章は、コラール的な安らかな楽章で後半の盛り上がりからトランペットのファンファーレは気分を落ち着かせてくれる。第3楽章は、これとうって変わって小気味よいリズムによって支配されている。がどことなく不安定な土台の上に築られている感じが拭いきれない。第4楽章は、人生の苦悶に対する彼の反抗が描かれている。がこれも終わりに近づくと勝利を得たかの様に結ばれている。この大団円は彼の人間性への深い理解と信頼感を裏付けるものなのか。それともこうあって欲しいというドヴォルザークの切実な願いを込めてのものであるだろうか。

(藤井部 勉)